

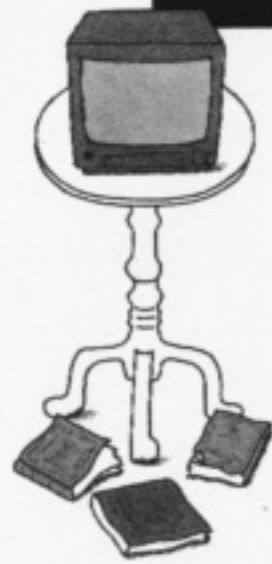


LA TÉLÉVISION
Jean-Philippe Toussaint

ジャン=フィリップ・
トゥーサン

野崎 歓・訳

テレビジョン



集英社

テレビジョン



ぼくはテレビを見るのをやめた。突然決心して、これからはどんな番組も見ない、スポーツ番組さえ見るまいと誓った。今から半年少し前の七月末、ツール・ド・フランスが終わったばかりの頃だった。ツール・ド・フランスの最終区間、シャンゼリゼを舞台とするレースの同時中継を、ぼくもご多分にもれず、ベルリンの自分のアパルトマンでゆったりと観戦したのだが、猛烈なラストスパートをかけたウズベキスタン人アブドゥジャパロフの勝利でレースが終わると立ち上がってテレビを消した。そのときの自分の動作、単純でなめらかな動作は今でもまざまざと目に浮かぶようで、何千回と繰り返してきたとおり腕を伸ばしてスイッチを押すと、画像は弾け、消えていったのだった。それでお終い、以来ぼくはまったくテレビを見ていない。

テレビはあいかわらず居間にあるが、見向きもされず画面は消えたままで、その後ぼくは触ってもいない。むろん壊れたわけではないのだからスイッチを押せば映るだろう。旧式の黒くて四角いテレビで、板に脚がくっついていてだけの、ラッカーを塗った木製の台に載っており、脚は黒い薄い本を開いてまっすぐに立てたようなデザインで、それが何だか恨めしげに見える。何色とも言えない色をした、奥深く不愛想な感じの画面は、まあ緑色と言えなくもないが、かすかに湾曲している。さまざまな調整用スイッチの並ぶ仕切りが横についた受像機の上には、Vの字型の二本の腕を、ちようどロブスターの触角のように突き出した大きなアンテナが載っていて、ロブスターを扱うのと同様、ここを掴んでお湯の沸騰した鍋にでも漬けてしまえば、いっそうきっぱり厄介払いできるというものだ。

ぼくはこの年ベルリンで一人きりの夏を過ごした。一緒に暮らしているドロンは、二人の子ども、つまりぼくの息子と、もうすぐ生まれてくるはずの、ぼくの見解では

女の子に違いない赤ん坊を連れてイタリアにバカンスを過ごしにいった。女の子だろうというのは、産婦人科の医師が超音波検査したところ、おちんちんが見当たらなかったのだ(たいていの場合、おちんちんがないのは女の子ということだろう、とぼくは解釈した)。

テレビはぼくの生活の中でそれほど大きな位置を占めてはいなかった。そう。一日平均一、二時間見るだけ(あるいはそれ以下かもしれないが、数を膨らませるほうが好ましく思えるし、少なく見積もって自分を美化するつもりもない)。スポーツのピッグイベントは見逃さず、ニュースや、選挙があった夜の速報番組もときどき見たが、それ以外には特に見る番組もなかった。たとえば原則として、それにまた便宜上、ぼくはテレビで放映される映画は決して見ないことにしていた(点字の本を読まないのと同じことだ)。その頃だって、自分はテレビを見るのを即刻やめたとしてもまったく平気で何の痛痒も感じないだろう、つまりいささかもテレビに依存していないのだと思っていたのだが、ただしそれを実証しようとはまではしなかったのである。

しかしながら何か月前からか、ぼくは自分のふるまいが微妙に変わってきたことに気がついていった。午後はほとんど毎日家にいて、髭も剃らず、着古したセーターという楽な格好で、ソファに寝床の猫なみにしどけなく寝そべり、靴下もはかず、片手を股ぐらの下敷きにして三時間か四時間もぶっ続けでテレビを眺めているのだった。このぼくがだ。今までと違って、この年ぼくはテレビで、テニスのフレンチオープンを片っ端から見ていたのである。最初のうちはときおり一試合見るだけだったが、準々決勝までくるとトーナメントの行方が本当に気になり始めたというか、少なくともドロンに対しては、午後テレビの前に延々と陣取ったきり何もせずにいることをそう釈明していたのだった。当時家にいるのはたいていぼくだけだったが、ときどき家政婦がやってくることもあり、居間のぼくの傍らでシャツにアイロンをかけながら腹立たしさをぐつとこらえている様子だった。ひどい時になると、正午に始まった実況放送は夜になってようやく終わった。見終わると胸がむかつき、疲れ果て、頭はからっぽで、脚はだるく目が鈍く痛んだ。シャワーを浴びにいき、生ぬるい湯を顔に長々と浴

びせた。こうなるともうその日は立ち直れない。正直に認めるのはためらわれたが、しかし明白な事実を受け入れないわけにはいかなかった。つまり、ゆるゆると四十の境にさしかかるに及び、テニスの試合を五セットぶっ通しで見るのは、ぼくにとって肉体的に無理になってしまったのだ。

そもそも、ぼくは何もしていなかった。何もしないとは、うっかり何かをする、あるいは強制されて何かをするということがなく、習慣や怠惰にも流されないという意味である。何もしないとは、考え、本を読み、音楽を聴き、愛を交わし、散歩し、プールに行き、キノコを採るといった、大切なことしかししないという意味なのだ。何もしないことは、人がいささか安易に想像するのとは反対に、方法と規律、幅広い理解力と精神の集中を必要とする。ぼくは今では毎日五百メートル、時速二キロのスピードで泳いでいる。つまり十五分でプール十往復、一時間に直せば四十往復のスピードというわけで、むしろ大した速さではない。しかしぼくは記録と闘っているわけではない。老婦人のようにゆっくりと泳ぎ（ただし帽子はかぶらず）、頭を理想どおりか

らっぽにし、自分のフォームと体に注意を集中して規則正しい動きを心がけ、半開きの口から吐く息は細かな泡になってぶくぶくと音をたてながら水面に昇っていく。プールの青みがかかった透明な水に囲まれて、ゆっくりと両腕を前に伸ばして水を大きく掻き、そのあいだ両足は膝のところで折り曲げ、ふたたびゆっくり両腕を広げると同時に、両足を揃えて水を蹴り出す。結局のところぼくは、人生がわれわれにもたらしてくれる喜びはいろいろある中で、水泳にとっても高い位置を与えているのだが、ただしこれまではいくぶん過小評価のきらいがあり、愛の営みのほうをはるかに高く買っていた。今まではそれがぼくのもっとも好きな活動だったのだが、もちろん考えることは別格としてである。実際、ぼくは愛の営みがむしろ好きで（理由は多々ある）、ここでその領域におけるぼくのスタイルを説明したいとは思わないが——それは放埒で、さも男らしさを誇示するような精力あふれるバタフライ四百メートルよりも、ただだらと泳ぐ平泳ぎの心静かな官能に近いものなのだが——、特に強調したいのは、愛の営みがぼくに大きな心の安定を与えてくれるということ、抱擁を終えたのち、仰向けに寝そべってシートに心地よくくるまりながら、過ぎ行くこの瞬間の単

純な幸福を味わっているうちに、心の底から上機嫌がわきあがってくるのを感じ、それが突然の微笑みと、いたずらっぽく秘密めかしたような瞳の光となってぼくの表情に表れる。ところで、水泳もまた同じ種類の満足、体の充実感を与えてくれ、それが少しずつ、ゆっくりと波のように精神に広がって微笑みをもたらすのだ。

こうして何もしないことに専念していたぼくには、もはやテレビを見ている暇などないとわかったのである。

テレビがわれわれに提供するのにはスペクタクルであって、いかに現実そっくりに見えるようとも（あるいは小型版の現実と言うべきか、あなたがテレビを見たことがあるかどうかぼくは知らないが）、それは現実ではなく現実の表象にすぎない。確かにテレビがカラー、二次元で与える現実の一見客観的な表象は、芸術家たちが自分たちの作品を通し現実のイメージを与えようとする際の、より洗練された、そしてはるかに間接的な表現以上に信頼がおけ、事実そのままの受け入れやすいものと思える。しか

し芸術家たちが作品で現実を表現するのは、世界を理解し、その本質をつかもうとしてであるのに対し、テレビは、たとえ現実を表現するとしても、それは生来の性質に従って、いわばうっかりしてのこと、技術的な決定論に流されて仕方なくでしかない。だが、テレビが一目でわかるような親しい現実のイメージを提供するからといって、そのイメージと現実とが同等のものということにはならない。なぜなら、現実のものであるためには現実には自らの表象に似ていなければならぬというのでもない限り、ルネサンス期の巨匠が描いた若者の肖像画よりも、国際的に有名ということに自国ではなっているニュースキャスターがニュース番組を司会しているところだと一見してわかる、小さな画面の上のテレビ映像のほうが現実により忠実なイメージであると考えられる理由はいささかもないのである。

ルネサンス期絵画における現実のイリュージョン、つまり絵の具や染料、油絵の具、カンバス上の刷毛の動き、筆や時には指を使つての微かな塗り直し、まだ少し濡れている亜麻仁油の絵の具の塊を親指のへりで軽く擦る動き、目の前に何か生きたものが

あるという事実、肉体、髪の毛、布地、衣装のひだ、複雑で人間的な、欠点も弱みもある人物、歴史を持ち、気高さ、感受性があり、眼差しを備えた何者か——数世紀を超えて力を及ぼすその眼差しを、数ミリ四方の絵の具が何と的確に表現するものだろう——、そうしたいっさいから生じるイリュージョンは、テレビが現実を表す際の、人間を介さない技術の機械的な結果でしかないイリュージョンとはそもそも根本的に異なるのである。

この年、ぼくは夏を一人ベルリンで過ごし、ティツィアーノ・ヴェチェッリオ（イタリアの画家、一四八八？—一五七六？年）に関する研究書の執筆に精を出すことにした。美術と政治権力の関係について長大な論文を書こうと思ひ立つてから数年になる。その計画は次第に十六世紀イタリア、とりわけティツィアーノ・ヴェチェッリオとカルル五世（神聖ローマ帝国皇帝、一五〇〇—一五八）に絞られていき、やがては絵筆にまつわる典拠の不確かな一挿話、つまりティツィアーノの手から落ちた絵筆を、アトリエを訪れていたカルル五世が身をかがめて拾ったという挿話をわが研究全体の象徴と考えて、研究の表題を『絵筆』とするに至つ

た。この年の初め、ぼくは教えている大学から一年のサバティカル・イヤー〔年度休暇〕をもらい、研究に専念する態勢を整えた。それと並行して、ぼくのような研究者を援助してくれる私的財団がベルリンにあることを知り、奨学金に応募するため、研究計画を事細かに説明する書類を作ったのだが、その中で特に力説したのは、カルル五世が一五三〇年から何年かまで（年月日というのは本当に苦手だ）滞在したアウクスブルク、とりわけティツィアーノがカルル五世のもっとも有名な肖像画を何枚か、たとえばプラド美術館にある大きな騎馬像や、ミュンヘンのピナコテークにある、青白い悲壮な顔をし、片手に手袋を持った座像を描いたアウクスブルクの街に行くことが、多くの研究にとってどれほど大切かということだった。アウクスブルクに滞在できるのならそれ以上ありがたく、有益なことはなかっただろうが、しかしまた実際のところこのティツィアーノに関する研究は、奨学金取得のために提出した小文においてぼくが言葉巧みに説いたほどには、どうしてもドイツに行かなければできないというものでもなく、アウクスブルクを訪れるのにパリから行くのも、ベルリンから行くのも大差はないのだった。理想はミュンヘンだったろう。とはいえ結局ぼくは（まんまと）

奨学金を獲得し、一家三人ドイツへと旅立ったのである。ドロンは七月初め、バカンスを過ぎしにイタリアに子ども二人を連れて出発——一人は手をつなぎ、もう一人はお腹にいれて（これは彼女のようにいつもとんでもない数の鞆や荷物を抱えている場合は実に便利である）——、ぼくは三人を空港まで送りにいった。飛行機のチケットはぼくが持った。空港のロビーで、出発便を告げる掲示板のほうに進み、頭を上げ、片手にチケットを持って、掲示板とチケットとを一瞬困惑した面持ちで見比べる自分の姿が、今でもありありと目に浮かぶ。それからぼくはカートの横で待つドロンのところに戻り、こう言った——自分がベルリン滞在中に発した言葉のいちいちを、ここにこれほど忠実に書きつける必要があるのだろうか——、二十八番ゲートだよ。本当？ とドロンが言った。途端にぼくの自信は揺らいだ。そう、二十八番ゲートだ（後ろを振り向いて確かめた）。ぼくらは長々とキスをしてから動き出し、二十八番ゲートの搭乗手続きカウンターの前で別れた。ぼくは息子の頭を優しく撫で、ドロンのトレーナーの中に手を入れてそっとお腹に触れてから、二人が金属製の小型簡略版凱旋門みたいな金属探知機の下をくぐっていくのを眺めた。じゃあね、バイバイと息子

が手を振った（そして今やぼくは泣きたくなかった。そういうのがみんな、このぼくなのだ）。

家に戻ると、ぼくは身の回りを少し片づけ、仕事を始めるのに何の支障もないよう、仕事部屋の中をきちんと整理した（翌朝早くから取りかかるつもりだった）。まず部屋にある棚板つきの黒い大きな箆筒をすっかり空にした。そこにはベルリン到着以来、おびただしい量の書類がたまっていた。郵便、請求書、名刺、研究に関係する未整理の資料、硬貨数枚、コンサートのチケットの切れはし、そして後でゆっくり読むつもりで取ってあったフランス語やドイツ語の新聞雑誌類からの切り抜きが山ほど。これらの記事を、ぼくはくる日もくる日も丁寧に切り抜いてきたに違はなく、机に座り慎重な手つきで切り抜いてから、箆筒の棚に持っていき、他の、やはり当座は捨てないことにした、つまりいつかは読むはずの切り抜きの上にそれを置く自分の姿がはつきりと目に浮かぶ。箆筒が完全に空になると、ぼくは切り抜きの選別作業にかかった。どっかりとあぐらをかき、ウールのセーターの伸びてしまった長袖を肘までたくし上

げ、大きな黒いゴミ袋を横において、まわりに積み上げたいくつもの山のてっぺんから一つずつ記事を取り、作業の流れの中でどうしたって記事の内容に目が向くのだが（ときおり、ぼくは古文書学者としての自覚ゆえ、立ち上がって机の上のペンを取りにいき、パラグラフに注をつけたり、文章に下線を引いたり、記事に日付を入れたりした）、たいていはゴミ袋に放り込み、高い評価を得たごく少数のものだけを残して、後で読むときの面白味を先取りして味わいつつ、全部の整理がつくとそれを寝室のナイトテーブルの上に載せにいった。続いて部屋をほうきで掃き、バルコニーに面した両開きの窓を開いて空気を入れ換え、小さなラグを外の風にはためかせ、ベッドの上のった書類ケースや紙挟みを片づけた。準備作業が完了すると寝室の目覚まし時計を七時十五分前に合わせ、最後にもう一度、アパルトマンがすっかり整頓され、仕事部屋が用意万端ととのい、机の上はきれいに片づき、パソコンの横にまっさらな紙の束が置かれ、きちんと並んだ本や資料が手にとって開くばかりになっているのを確認してから、そっと部屋のドアを閉めて居間に行き、ソファに座ってテレビをつけた。

こうしてこの時期、晩になるとぼくはしょっちゅう、何か悪い酔いにでも取りつかれたかのようにテレビをつけては、何であろうがお構いなく、番組を選びもせず行き当たりばったり、画面の運動、きらめき、変化に見入るのだった。自分のふるまいが妙な方向に逸れつつあったことに当時は気づいていなかったのだが、今から振り返るとこの束の間の熱中状態は、過剰な摂取を経てこそ乳離れできるのだとでもいうかのように、まさしくその後を訪れる断固とした決心の前兆だったと考えられる。ともあれ、ぼくは毎晩何時間もテレビの前を動かさず、落ちつかない画面の放つ不連続な光に包まれて画面を見据え、こちらの顔面を照らす映像、万人に向けて同時に、盲目的に送られながら、その実、特に誰に向けて送られているわけでもないそれらの映像の流れに少しずつ浸されていったのだが、狭い周波数帯に押し込められたチャンネルはいずれも、日常的に世界を襲撃する電波が織りなす、巨大な絨毯の編み目の一つにすぎないのだ。抵抗できないまま、そうやって画面の前に座り続ける自分が墮落しつつあることは意識していたものの、しかしリモコンを手から離すことすらできず、機械的に、物狂おしく、即席の劣悪な楽しみを求めてチャンネルを切り替え続け、虚しい高

揚、際限ないいたちごっこに陥りながら、さらになお低俗さ、うら寂しさを求めてやまないのだった。

いたるところそれは同じ未分化の映像、余白も見出しの飾りもなく、説明もなく乱暴で理解しがたく、やかましい、カラーの、醜い、うら寂しい、攻撃的で快活な、ピートのきいた、互いにそっくりな映像であり、典型的なアメリカの連続ドラマであり、音楽のビデオクリップであり、英語の歌であり、クイズ番組であり、ドキュメンタリー番組であり、映画から勝手に取ってきた一場面であり、抜粋、そう抜粋であり、軽快なシャンソンの一節であり、いきいきとして、観客はリズムに合わせて拍手し、政治家たちがテーブルを囲み、討論会であり、サーカスであり、アクロバットであり、クイズ番組であり、幸福であり、驚きのあまり信じられないといった表情で笑みを浮かべ、抱擁し合い、涙を流し、その場で自動車一台が賞品として与えられ、感動で唇を震わせ、ドキュメンタリー番組であり、第二次世界大戦であり、葬列であり、捕虜になったドイツ兵たちが縦列を作って道端をのろのろと歩き、ユダヤ人絶滅キャンプ

の解放であり、地面に積み上げられた人骨の山であり、ありとあらゆる国の言葉が飛び交い、チャンネルは三十二以上もあり、ドイツ語、とりわけドイツ語の放送であり、いたるところ暴力と銃撃であり、街頭に横たわる死体であり、ニュース番組であり、洪水であり、サッカーであり、クイズ番組であり、カードを持った司会者であり、カウスターに表れる数字をスタジオのみんなが頭を上げて見つめ、9、ナンバーは9、拍手喝采であり、コマージュルであり、バラエティー番組であり、討論会であり、動物であり、スタジオ内でのボート漕ぎ競争であり、選手がオールを漕ぎ、丸いテーブルのまわりに座った司会進行役たちがそれを心配するような様子で眺め、ストップウォッチが画面に二重映しになり、戦争の映像であり、撮影も録音も奇妙なほど不安定で、大慌てで撮られたもののように、映像が震え、カメラマンも走りながら撮ったらしく、通りを何人が走っていて、誰かがその背中を撃ち、一人の婦人が倒れ、弾が当たったらしく、五十代の婦人が歩道に横たわり、いくぶん色褪せたグレーのオーバーの前が少し開き、ストッキングが破れ、腿に負傷しており、婦人は叫び、ただひたすら叫び、腿の傷がぱっくりと口を開けているせいで純粋な恐怖の叫び声を上げ、痛みを訴

える婦人の叫び声、助けを求めるその声、フィクションではなく、二、三人の男たちが婦人を助けに戻ってきて、歩道の縁に抱え上げ、砲撃は止まず、それは資料映像であり、ニュース番組であり、コマージュルであり、日暮れ時の牧歌的な丘の道をゆっくりと蛇行していく何台もの新車であり、ハードロックのコンサートであり、連続ドラマであり、クラシック音楽であり、臨時ニュースであり、スキートのジャンプ競技であり、屈み込んだ選手が弾みをつけてジャンプ台に飛び出し、ゆるゆると台を滑り降りてから地面を離れ、空中で凝固し、飛ぶ、飛ぶ、まったく素晴らしい、この前屈みになって凝固した体が、身じろぎもせず、確固として空中を飛ぶ様は。それでお終い。もうお終い、テレビを消すと、ぼくにはもはやソファで体を動かす力もなかった。

スイッチが入っているときのテレビの主要な特徴の一つは、人工的なやり方でわれわれを絶えず目覚めさせておくということである。つまりわれわれの精神に向けて常にシグナルを発し、視覚的であれ聴覚的であれ、ありとあらゆる種類のちよつとした刺激を送ってわれわれの注意を喚起し、精神を張りつめた状態に保たせる。だが、そ

これらのシグナルに刺激されたわれわれの精神が、思考を働かせるための力をかき集めるやいなや、テレビはもう他のものへ、次なる新たな刺激、前のものに負けじと甲高く叫ぶシグナルへと移っており、その結果やがて精神は、おのれを欺く際限ないシグナルの連続によって覚醒させられるというよりも、むしろそれまでの不幸な経験に学び、もうこれ以上欺かれまいと恐らくは願って、以後は受け止めるシグナルの実際の性質を先取りするようになり、思考のための力をふたたびかき集める代わりに、逆に力を緩め、目の前の映像のなすがまま、消極的な放浪に身を委ねてしまう。こうしてわれわれの精神は、これほどまでにそそれながら同時にまたほとんど刺激を受けないことで麻痺したようになって、テレビを前にまったく受け身になってしまふのである。映像に対していよいよ無関心になっていく精神は、遂には新たに与えられるシグナルに対していささかも反応しなくなってしまうし、それでもなお反応しようとする場合でさえ、精神がテレビに欺かれるがままであることに代わりはなく、というのもテレビは流れであり、絶えず先へと逃げていくがゆえに思考に生まれ出る時間を与えないばかりか、精神とその対象とのあいだの富の交換を一切認めないという点で、テレビは水も漏らさぬ堅牢さを備えてもいるからだ。

テレビは水も漏らさぬ堅牢さを備えてもいるからだ。

その週の初め、ぼくが遂にティツイアーノ・ヴェチエッリオとカルル五世についての研究に着手する準備にかかっていた頃、上の階の隣人、ウーヴェとインゲのドレツシャー夫妻（フランス語に訳せばギーとリュース・ペレールといったところか）が、バカンスに旅立つ前日にぼくの家のベルを鳴らし、留守のあいだ植物の面倒を見てもらえないかと頼んできた。ぼくの驚きはご想像頂けると思う。よく説明して、必要な事柄をすっかり伝えたいので、今日家にお茶を飲みに来てくれないかという。昼食後上の階を訪れると、夫妻はかなり冷やかな態度でぼくを迎え、一言も言わずに食堂の円テーブルにぼくを座らせた。テーブルはまだ片づいておらず、汚れた皿が何枚か、